

第35回日本教師教育学会（2025年9月20日、21日 於宇都宮大学） 9月21日 第32分科会

認知モデルの開発の視点から指摘する共育の到達点

（原点、（起点、終点）、到達点）

目的：世界を飲み込む人財を育成し、人類の課題を解決する共育を社会実装する

内容：認知モデル（知っていること、できること）の完全混合（利己、利他）←一体化

効果：戦争文化から平和文化への回帰

（共同体体験即個物記憶, Output, Outcome）

All right reserved SHIMOMURA Takuji, 2025

第34回 日本教師教育学会（2024年9月21日、22日 松江）

自由研究「生徒が、我慢、ではなく、上手く表現する、認知モデルを創るカリキュラムの開発」
ラウンドテーブル「私が体系化した認知モデル」

日本社会の課題

1 現代の多くの日本人は自ら課題を設定し、それを解決した体験がないまま、成人して就職する。会社員になると仕事のことで頭が一杯になり未来を考える余裕がなくなる。

2 1990年代、豊かな社会からバブルの崩壊を経験。30年後、子供食堂が乱立する社会になった。この間、民営化、規制緩和、社会保障の削減により国民は貧乏になり社会的共通資本は海外の投資家に切り売りされた。

Q「学習指導要領通りに先生が生徒に教えて、生徒はそれを一所懸命、記憶してテストで良い点を取って、良い成績で大学を卒業したとして、その生徒がそれまでに受けた教育は何を保証しているのか？」

A「社会を幸せにしてくれるヒト」

私のA「私が生徒と接する期間は限られています。限られた期間に指導要領で求められているタスクを実行して、生徒が知識を獲得して記憶に留めておくことができるように働きかけます。共育の目的は知識の記憶ではなく、人間関係を上手く創って行くことだと私は考えています。この観点から私が共育を提供した生徒には、自身の認知モデルを自分の言葉で語れるようになってもらい、対話している相手の認知モデルを推論できるようになって貰います。勿論、そのレベルは生徒によって異なってしまいます。私が担当した期間、それぞれの生徒がそれぞれのレベルで認知モデルを扱えるようになります。最も効果的に本人が認知モデルを扱える状況は、夢中になって取り組む活動を様々なヒトと一緒にやって実行するプロジェクトです。」

認知モデルの開発の視点から指摘する共育の到達点

概要

2025年1月とあるFacebookコミュニティでシリコンバレーのITベンチャーがエンジニアを全員解雇した事件が公開された。ChatGPTPro（有料版生成AI）でプログラミングするプロジェクトをエンジニア自身が推進した結末。

2025年3月3日、広島市で開催された米日カウンシルのイベント「ひろしまから希望へ：世界平和と安全保障に対する日系アメリカ人の視点」に参加。開演前、隣の高校生に本事件を伝えたところ、「残酷ですね」と不安を口に。「あなたが誰かに貢献するアイデアが持てば、エンジニアを雇わなくてもそれを実行できる時代になったということですよ。」と伝えしたが、返答はなかった。

（経済的困窮, 社会不安）は企業社会主義が創っている。戦争は戦争ビジネスに起因する。本稿では、反社会性パーソナリティ障害（DSM-5）を中心とする戦争文化（WarCulture）を人類本来の平和文化（PeaceCulture）へ回帰させる認知モデルの育成、が共育の到達点であることを示す。

キーワード

- (3) 社会の変容と教育課題
- (2) 教師教育の理論
- (9) 省察と教師の成長

用語の定義

（認知モデルを開発する）とは：主観の確立。認知モデルは認知の枠組みによって形成された主観。一人一人異なる。認知モデル（主観）は推論（帰納, 演繹）の癖を決めている。主観が自己の意図通り形成されていることを評価するには共同体身体への自己開示が必要となる。自己開示しない限り、意図通り主観が形成されたか否かは自己評価できない。この自己評価は欲求が発火してそれが満たされるまで繰り返される。主観の他者評価は不可能。

（認知モデルの開発の視点から指摘する）とは：主観の確立＝人格形成の到達点。自己が個物身体を介して共同体身体の中で欲求を満たすことを可能にする主観を確立すること。これは、私が指摘する共育の目的。

（共育の到達点）とは：共育の当事者が決める。ここではすべてのヒトが幸せであり続ける地球を体現する当事者になることを到達点とし、そのリスクマネジメントの対象を人類の課題、すなわち反社会性パーソナリティ障害（DSM-5）への対応であると仮定する。反社会性パーソナリティ障害とは、精神疾患の一つ。（呼吸をするように嘘をつく, 騙される方が悪い）認知モデル。例えば、#イスラエル軍は無辜のパレスチナの民を虐殺する。#ビルゲイツさんは欧米の大衆から「逮捕しろ」という声が上がっているのにも関わらず、安全性の確立していないワクチンを安全だと偽って世界中の子供から高齢者まで接種させてお金儲けをする。反社会性パーソナリティ障害は（恐怖, 不安）の（強度, 持続）から発症するとされている。親から子への家庭内暴力、兵士のPTSD、CIAによる拷問は反社会性パーソナリティ障害のリスクとなる。列举した事例はすべて身体拘束を伴う。身体拘束を不可能にすれば、これらのリスクはなくなる。身体拘束を伴わない（恐怖, 不安）はその場面において自己理解が不足していることが原因。自己（（省察, 開示, 評価）＜理解）。知らないことが（恐怖, 不安）の原因となる。どんな場面においても知らないことを知る行動を取ることができれば（恐怖, 不安）をコントロールできる。すなわち、反社会性パーソナリティ障害をリスクマネジメントできる。この知る行動とは

（自分を上手く表現する）ことに他ならない。（自分を上手く表現する）ことは、すべてのヒトが幸せであり続ける地球を体現することにも繋がる。（自分を上手く表現する）には、自分の望みの自覚を要する。自分が何を望んでいるのか分からなければ表現は混乱のリスクとなる。望みが分からないことの開示は混乱を収束する糸口になる。ここに示した論旨を（共育の到達点）の枠組みでまとめる。ヒトは共同体とともに生きる。共同体がなければ欲求は満たされない。個物身体と共同体身体が共に幸せでなければその関係は破綻する。最終的には共同体身体を個物身体が手放すか、共同体身体から個物身体が排除される。従って、（共育の到達点）は、自己が個物身体を介して共同体身体の中で欲求を満たせるように（自分を上手く表現）できるようになる。誰にとっても（恐怖, 不安）は（上手く表現できる自分）に対する障害となる。（恐怖, 不安）に対応するために自己理解を深化させて、身体拘束のリスクを避ける行動が取れるようになる。更に、共同体身体から個物身体の身体拘束を不要にする次世代の社会システムを構築するヒトになる。すなわち、戦争文化から平和文化へ回帰させる人財を育成する。

背景と本発表の狙い

前回「生徒が、我慢、ではなく、上手く表現する、認知モデルを創るカリキュラムの開発」を報告。日本の2つの課題を特定。解決の取り組みを示した。今回、「認知モデルの開発」では主観の確立から個人（個物身体）と社会（共同体身体）(1)との関係構築を扱う。

#三原発グローバル産業 は人類を企業社会主義から地域自給自治社会へ回帰させる。生産を自動化する道具(AI+ロボット)を開発するのは地域の小学生、中学生、高校生、大学生。遊ぶように自動生産道具を開発するコミュニティスクール。支援する地域住民。その道具で信用を稼ぐ学校カンパニー。 本発表は地域自給自治社会を持続可能な（共同体, 経済）のモデルとし、それを可能にする地域住民の育成が共育の到達点であることを示す。

共育の場を持続可能にする認知モデル

枠組み：共通目的はお互いの幸せ。その土台（自給自足, 一人一人の自由時間の最大化）の安定稼働に向けて互いに独自の（知っていること, できること）を組み合わせる。我々は2つの身体を持つ認知の中で生きる。自己は個物身体を介し共同体身体で欲求を満たす。我々は共依存を前提とした自律により、お互いの幸せを尊重する。一人一人独自の（視点, 記憶）が社会を活性化する。相手の不幸を自己の幸せに感じるのは反社会性パーソナリティ障害（DSM-5）のリスク。過度になると排除される。例えば、18世紀マリーアントワネット夫妻の斬首、20世紀ニコラエチャウシェスク夫妻の処刑。今後の処刑リスクを抑制するのは地域自給自治社会。(2)

認知モデルの開発

枠組み：主に、生徒間の協働作業、相互理解を深める体験に伴う認知モデルの開発を示す。（主観の確立, 自己組織化）の前提は、自己理解＝（自己省察, 自己開示, 自己評価）。自己と身体の間にも相互理解の深化はある。Football（サッカー）でバナナシュートが打てるようになる。ハサミを上手く使って自分で散髪する。行動が自己開示。蹴ったボールの軌跡、散髪結果で評価。この自己理解は、相手に私を理解して貰うために言葉を選び発する行動に繋がる。この時の相互理解は（自己に対する目の前の（身体が異なる自己）の認識への解釈）と（自己の（身体が異なる自己）への解釈）との間に起こる。使う言葉と相手の反応で評価する。覚醒時、我々は推論の中にいる。自己理解が欲求を満たすレベルに到達していなければ理解を深めるか不自然な力を使う。反社会性パーソナリティ障害は不自然な力（お金, 不安, 恐怖）を使う。その手段が（暗殺を含む武力, 通貨発行権, 株式市場）。（不安, 恐怖）は自己理解で解消される事実気づかない。反社会性パーソナリティ障害への対応はトレーニングで

触れる。生徒間の協働作業を促進。意見の衝突から相互理解、そして合意形成の体験を繰り返し味わう。

トレーニング：目標「誰もが本当の自分からなりたい自分になる」 開発指標「お互いに（知っていること, できること）が異なる事実を受け入れる。共同体身体と強制はしないさせない関係を結べる。共同体を破壊する反社会性パーソナリティ障害に対応する。」 手順「簡単なことから難しいことへ、知っていることから知らないことへ」 手順の実態が社会的共通資本。共同体身体に蓄積。 生徒が地域自給自治社会の当事者として地域住民と一緒に生産活動（食糧, エネルギー, 生活品）を体験。協働作業中、意見が衝突した時、主張に至るBackgroundを相互理解。意見の衝突を回避する方法、合意できる道筋を見つける。最終的に協働作業を打ち切り、お互い独自に共通目的に向かう道筋は残す。生産を自動化する道具を学校で開発し、地域の生産活動に貢献。現在の教科学習は都度、協働作業を推進するための科学知識技術の提供に留める。知る目的を創るヒトになる。（共同体, 経済）の中心は何であるのかを自分の言葉で語れるようになる。お金だと思込まれるような環境をお金の力で創って来た人類史を知る。共同体の安定稼働を破壊するのは反社会性パーソナリティ障害。（不安, 恐怖）が反社会性パーソナリティ障害の原因。常に共同体身体が（不安, 恐怖）の状態にないと（不安, 恐怖）を感じる。会社員はお金がないと生きて行けない恐怖、働く場所がないと生きて行けない恐怖がある。反社会性パーソナリティ障害を見守り<注視<監視<行動制限の体制を共同体に構築し機能させる。本来、軍はその頂点にある。更生保護は一つの仕組み。生産の主体を会社員から地域住民に回帰し地域自給自治を体現すればお金がないことに起因する（不安, 恐怖）は不要になる。

今後の活動

本大会で（認知モデル, 共育の到達点）の議論を深め、次の大会でラウンドテーブルを開催する。ラウンドテーブルに向けて広島県三原市において（認知モデル, 共育の到達点）をテーマとした地域自給自治社会の開発を推進する。

（１）個人と社会を身体として扱う理由。どちらの身体も同じprincipleの中にある自己（principle）の写像だから。

（２）18世紀の王家は互いに婚姻関係を結びそれぞれが支配する国で国民から搾取。20世紀の共産主義者は組織に階層を創り上位者ほど豊かになる搾取の仕組みを運用。全体主義の変遷の中で起きた処刑。現代の企業社会主義の中心家系への自己理解を促す。

一つのモデル

（生涯学習＝地域社会）<地域社会を理解して人類史と世界の仕組みを推論する

（<：左辺から右辺を導き出す, 右辺は左辺の写像）

身体性から共育をデザインする

遊び<学び<貢献のサイクルを回す

共同体体験即個物記憶（推論, 検証）の精度を高める

小学1年生の担任が生徒に最初に伝えること

「あなたが面白くて夢中になれることを授業にします」

モクモク会

3部構成

学びから認知モデルの定着へ

1部 黙々作業 各自が手を動かして自分が面白くて夢中になれる作業に集中

2部 シェアの時間 一人一人の生徒が楽しんでいることをみんなに紹介

3部 雑談タイム 級友との雑談。目的は協働作業を見つけること

月1回 学年間合同のモクモク会

小学4年生から

地域社会 1（共同体体験即個物記憶）

地域の生産現場(食糧, エネルギー, 生活品)で生産活動に参加

品質保証体制（組織, 作業フロー）を知る。

一人一人の生徒が地域の自給自足に貢献する認知モデルを発揮する

探索的活動 生産現場での困り事の解決、生産性を高める、方法を明らかにする

検証的活動 解決法を実行する 道具（AI+ロボット）を開発して実装する。

地域社会 2（省察, 整理）

3部構成のモクモク会

一人一人の生徒が地域の自給自足に貢献する認知モデルを涵養する

1部 黙々作業 地域の生産活動で体験してきたことの記録

2部 シェアの時間 生産活動で体験してきたことをみんなに紹介 地域の大人が困っていること
その解決法

3部 雑談の時間 級友との雑談。生産活動への理解を深める。解決法のアイデアを温める

